

「出来事」の語りから「人生」の語りへ

——被爆者のライフストーリー聴き取りをめざして

富永 佐登美

原爆投下から六十六年、長崎の被爆者の平均年齢は七十七歳を越えた。彼らの中には、被爆体験を後世へ伝えようと、手記の執筆や講話の実践をおこなっている人も多い。だが、彼らは被爆体験を中心に語り、被爆以前や戦後の生活には簡単に触れる程度に留める。つまり、彼らは「長崎への原爆投下」という出来事を伝えるために、自身の体験を言葉に表しているのであり、自身の人生を語っているわけではない。しかし、被爆体験が被爆者の人生に少なからぬ影響を及ぼし続けていることは想像に難くない。歴史社会学の視点からも、被爆者の人生を通しての語り（ライフストーリー）を記録することは今後の重要な課題である。

桜井厚は、ライフストーリー研究におけるオーラルヒストリーとライフストーリーを分類している。「個人の人生経験における特定の局面に注目」するのがオーラルヒストリーであり、その目的は歴史的な出来事の再構成にあるという。対して、ライフストーリーは個人が歩んできた自分の人生について語ったものを記録

することである（桜井2002）。

桜井の分類に則すれば、現在長崎においておこなわれている「被爆者による被爆の語り」は、オーラルヒストリーと言えよう。まさしくその語りは「歴史的な出来事の再構成」を目的としているからである。

被爆者であれば、講話の内容が被爆中心となるのは自然なことであろう。それらを記録し伝えていくことに大きな意義があることも言うまでもない。だが、私たちは、被爆者の人生のその部分を知るだけでよいのだろうか。

ここで、長野県飯田・下伊那地区の、ある市民グループによる活動の事例を紹介したい。このグループは、地域から特に多かったという満洲への開拓移民やそこからの引き揚げ体験者に対する聴き取り調査をおこなった。五年の間、対象者に複数回会い、その人生の語りを聴き取り、文字化し、ライフストーリーとして再構成して（彼らは「作品化」と表現している）、出版したのである。そして、グループ内部で活動した本島和人と、研究者の立場で活動に関わり続けた蘭信三が、その活動について研究報告をおこなっている（本島2006、蘭2006）。

このグループの活動の特徴は、その「複数性」と「再帰性」にある。彼らは多様な世代数人を組み合わせ、幾度にもわたって話を聴き取る方法をとった。聴き取り後の作業においても、常に複数の人間が意見を交換しつつ進めたという。結果、この活動は、関係者の間に思いもよらぬ相互作用を生み、メンバーのみならず体験者や、出版を通して地域にまで、出来事や地域に関する新しい想起や認識をもたらしたという。ライフストーリーの聴き取り

実践が地域に変化をもたらす結果を生んだケースといえよう。

私も、自身の研究におけるこれまでの聴き取り調査において、自分が対象へもたらす影響を実感してきた。聴き取り調査とは、対象者から情報が一方的に流れるだけでなく、複数の主体が多様な想起と変化を創り出す、非常に動的な相互行為なのである。

現在、長崎での被爆者の語りは、いわば一方的な情報の伝達に留まっている。少なくとも、本島や蘭が経験したような、相互作用と新しい想起・認識を創出させる場が出来るまでには至っていない。

長崎でも、複数性と再帰性を持った聴き取りの実践はおこなえないだろうか。それも、被爆という歴史の出来事のみを聴き取るのではなく、特異な経験をした人生を聴き取ることとを目的として。出会い、聴き取り、文字に起こし、作品化するうちに、対象者と聴き取り実践者の間に相互作用を生み出すことが、あるいは、活動を通して新たな歴史や地域への関心と認識を生み出すことが、可能となるはずなのだ。

まず、多様な世代の複数の人間が、被爆者に複数回にわたって話を聴く。その結果を複数のメディア（映像、音声、トランスクリプト、聴き取り実践者によるライフストーリーの再構成＝作品）のデータベースに整理する。このデータベースがあれば、後日、別の人を通しての新たな再構築も可能である。すなわち、ある被爆者のライフストーリーが、無数の表象を生み出す可能性を持つことになる。その被爆者について、無数のテキストスタイルが生成され続

ける。それら無数のテキストスタイルを幾重にも連ねることで、「被爆」という歴史の出来事をも表現できるのではないだろうか。

聴き取りをおこなうには今が最後のタイミングかも知れぬ。被爆者のライフストーリー聴き取りとデータベース構築は、ここ数年でおこなわれねばならぬ喫緊の課題である。そのうえで、被爆者、聴き取り実践者、そして被爆から約七十年後の長崎において、被爆や地域に関する認識にどのような変化や影響がもたらされたかを検討する。これもまた、ひとつの継承の形となるのではと、私は今考えている。

参考文献

- 蘭信三 2006 「オーラル・ヒストリー実践と歴史との〈和解〉」『日本オーラル・ヒストリー研究』第五号 P17～37
- 本島和人 2006 「満洲体験者と市民の出会い——地域で満蒙体験を語りつぐこと——」『日本オーラル・ヒストリー研究』第五号 P23～36
- 桜井厚 2002 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房

注：「オーラルヒストリー」や「ライフストーリー」という表現とその分類については、学会においてもまだ定義が確定されていない。そのため、蘭と本島の研究発表では「オーラルヒストリー」という表現が用いられているが、彼らの実践は、桜井の分類においては「ライフストーリー」の聴き取りにあたる。